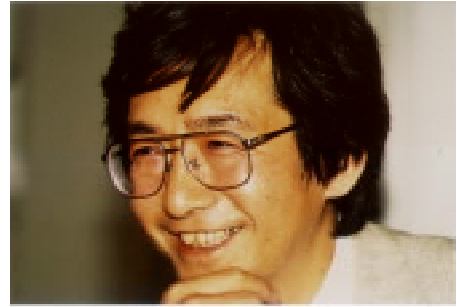


Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目 次	見出し / 執筆者	掲載頁
土木史ニュース	日本の歴史を塗り替える三内丸山遺跡	塩 井 幸 武 1 , 6
フォーラム	「土木史研究も……一般教養と専門」	篠 原 修 2
地域のニュース	「歴史国道」の指定について	門 田 博 知 3
	オホーツクの峠に残る	今 尚 之 3
	コンクリートアーチ橋	
海外土木史	アメリカ土木学会における土木史	アラン・ブラスーン 4
	および土木遺産に関する活動	
関連学会ニュース	日本建築学会における建築史分野	清 水 慶 一 4
	の活動と課題について	
学会の動き	江戸城外堀遺跡・姿現わす	5
	委員会だより（土木史研究委員会）	6
土木史研究発表会	第16回土木史研究発表会・報告	7
	清 水 浩志郎・木 村 一 裕	
土木史関係図書	土木史関係図書（定期刊行物、雑誌 - その2）	8
行事案内	1st International and 8th Australian Engineering Heritage Conference.	8
	International Planning History Conference.	

「土木史研究も…… 一般教養と専門」

土木史研究委員会編集小委員会委員長
篠原 修（東京大学 教授）



歴史研究というものがいかに大変なものであるか、その大変さをまず、お隣の建築史研究のエピソードから。

僕が農学部林学科に助手、助教授として在籍していた時代の師は塩田敏志先生で、先生は林学科卒業の後、建築史を志して東大の建築学科に入り直した。当時の建築史の教授は名著と言われる「日本建築史序説」を著した太田博太郎先生である。塩田先生の言によると太田先生は毎日、くる日もくる日も朝の8時から深夜に及ぶまで、文献を机の前に座して読んでいたという。「こんな事は僕にはとうていできないと思って建築史はあきらめたんだよ」と塩田先生は僕に述べた。

景観研究の創世期の昭和40年前後、中村良夫さんはその研究方法論を巡って伊藤ていじ先生に意見を求めたと言う。我々景観の仲間では伊藤先生は「日本の都市空間」をまとめた人として著名であるが、本職は日本建築史である。伊藤先生は「研究とは屋根裏を這いずり廻ってやるものだ」と言われたそうである。先生の専門は民家研究であったから、古文書を発掘するのが決め手の一つで、その為には屋根裏を這いずり廻ることが必要だったのであろう。研究というものはそういう汗臭いものかと思い、歴史研究とは時間のかかる大変なものだと思った。

景観研究が鈴木忠義先生のもとで始まったのは昭和30年代の後半だから、それから30年余の月日が流れた。時代毎の要請、流行に応じて景観を手掛けた研究者は少なくなかったが、今、景観研究者として残っているのは、当たり前のように、景観を専門としようとして来た人間のみである。C.G.を勉強していてそれが景観に応用できるから、あるいは、橋梁が専門で景観は橋梁に重要だからと、景観研究もと考えた人たちは息切れしてしまっている。何故こうなったのかという理由を僕なりに考えてみると以下ようになる。第一の理由は覚悟の問題であろう。土木計画や橋梁を専門とする人間にとっては景観はいわば出城の一つにすぎないから、形勢が悪くなれば本丸に逃げ込むことができる。しかし景観を本丸とした人間には退却するところはないから必死である。この必死さが研究の発展を分ける。第二の理由は一般教養と専門の取り違えに起因する。景観という現象

は物事を見ての話だから、人間である以上誰でもわかる。従って、研究の対象としてはいかにもとつき易い。水理学や土質力学のような難解な式もない。しかし、あれこれと景観について感想を述べることに、ある方法論に従ってそれを体系的に解析すること、あるいは構造物を美しく仕上げる、つまりデザインすることの間には相当の落差がある。この落差が専門が専門たる由縁なのであるが、土木の人間には水理学や構造力学では理解できても、景観ではその落差が見えないらしい。

僕は昔から歴史が好きで、一般の歴史書や土木の歴史を読むことを楽しみとしてきた。しかし上述の理由で、自分を土木史研究者であると思ったことはない。史料の検索、史料批判に始まる歴史研究のやっかいさを少しは知っているからである。しかしここ10年程デザインをお手伝いしている内に、どうしてもデザイン史を研究する必要が生じてきた。例えばダムデザインのを手掛けると、先人達がどのような条件のもとで、どのような思いを込めてデザインしたかを知る必要に迫られる。それがわからなければ、先人の遺したダムの本当は理解できず、又先人達のデザインの蓄積を受け継いで自分のデザインを展開することは出来ない。蓄積を受け継げなければ、そのデザインは今の、自分一人の薄っぺらなものにならざるを得ない。注意深く、歴史研究の深みにはまらぬように、範囲を限定して恐る恐るやり始めていると言ったらよい。

土木史という研究分野に対する認識は、僕の体験からすると、かつての景観によく似ているように見える。極めて取っつき易く、一般教養と研究の区別がつきにくく、本丸と出城の自覚なしに。しかし、土木史とは冒頭のエピソードにも述べたように景観研究以上に時間のかかる手強い分野である。あるかないかもわからぬ史料を求めて這いずり廻ることに代表されるように。土木史研究とは極めて魅力的であると同時に極めてリスクの大きい分野である。まず40才までは鳴かず飛ばずを覚悟しなければならない。十分に時間を使える人、それを自分の本丸にしようとする人のみが本物の土木史研究に耐え得るのだと思う。「土木史研究も……」という時代は去りつつある。

「歴史国道」の認定について

広島工業大学 門田 博知

土木史について考えるといろいろのことが頭に浮かぶ、人々の生活の姿を思い浮かべることもそのひとつである。昔の町の道路づくりにも町づくりの歴史があり、昔の町並みを今日まで継承している町もある。

建設省が一昨年あたりから全国の各県や工事事務所に呼びかけて、歴史上重要な幹線道路として利用され、国として特に重要な歴史的・文化的価値をもつ道路を「歴史国道」と呼び、その道路を対象に、保存、復元および利用を図り、歴史文化を軸とした地域づくりと活性化、道と地域の歴史文化の継承などを目的として「歴史国道」整備事業が行われることになった。

これは素晴らしいことである。基本コンセプトとして、歴史とロマンの体験みちづくりをにかけている。日常生活の中に歴史を生きづかしていくという点で、土木史や町づくりの歴史を伝え、継承し、保全いくのに大いに役立つ。

これらは、交通体系の激変によって崩壊した町並みが多い中で、昔の人々の生きざまが今日も受け継がれ、道路と共に伝統的な町並みが後世まで脈々として引き継がれていくことが担保できれば、それは極めて意義深いことである。

土木史は人々の生活史でもある視点も持つことができればと考えている、この度の「歴史国道」の整備事業が意図している成果をあげることを期待したい。

中国地方では、平成7年に石見銀山街道「天領石見銀山」および出雲街道「新庄宿」、平成8年に、石見銀山街道「上下宿」が「歴史国道」として認定された。なお、上下宿は大森銀山産出の銀、いわゆる「石州運上銀」の山陰から山陽道への輸送路に沿う豪商の宿町で、白壁や格子戸、妻壁に張り出した卯建等を備えた当時を偲ばせる重厚な町並みはもとより、道標、旧豪宿や天領旧街道上下代官所の石垣が現存している。

オホーツクの峠に残るコンクリートアーチ橋

(旧国鉄根北線幾品川第一橋梁と北海道の鉄道コンクリートアーチ橋)

小樽商科大学 今 尚之

オホーツク海に面した北海道斜里町から太平洋側の根室へ向かう国道244号線は、人跡まれな根北峠を越える。この峠越え区間には、古代ローマの水道橋を彷彿させるような長さ144m、高さ18mのコンクリートアーチ橋が残存している(写真)。地元で越川橋梁と呼ばれる旧国鉄根北線幾品川第一橋梁である。現在、国道と交差する2連分が撤去されており、さらに、国鉄清算事業団の財産処分に関連してその撤去、保存が議論されているところである。

根北線はオホーツク海側と太平洋側を短絡し、沿線の資源開発と拓殖を目的として1938(昭和13)年より斜里側から工事が開始された。しかし、日中戦争の影響で工事中止となり、幾品川第一橋梁は現在に至るまでそのまま放置された。タコ部屋に代表される過酷な労働と、一度も列車が渡らずに現在に至るという悲しい歴史を持つことや日中戦争中の資材不足により鉄筋の代わりに竹筋が用いられたという説までも流布されたため、地元の郷土史家等から高い関心が寄せられている⁽¹⁾。

ところで、北海道の鉄道用コンクリートアーチ橋は昭和10年代より建造が始まった⁽²⁾。それらは建設材料の現地調達による工事費の低廉化を目指したもので、その嚆矢は旧士幌線の上士幌 - 糠平間の6橋である。その後士幌線の延長部分と幾品川第一橋梁が建造され、第二次世界大戦中には函館近郊の戸井線においても建造された。何れも現在は供用されてはならず、撤去の対処となっている。しかし、可能であれば土木技術と地域の歴史を記録する構造物として、現状のまま残しておいてもらいたいものである。



旧国鉄幾品川第一橋梁(撮影：河野哲也氏)

脚注*****

(1) <http://oropas.sec.or.jp/News/LIBRARY/212DB/sa/SHARI/BUNKA3.html>を参照された。

(2) 今 尚之、中岡良司、佐藤馨一：戦前期鉄道用コンクリートアーチ橋の地域計画的評価、土木学会北海道支部論文報告集第52号B, 1996

アメリカ土木学会における土木史および土木遺産に関する活動

アメリカ土木学会土木史委員会委員長 アラン・プラスーン

アメリカ土木学会における土木史と土木遺産に関する活動は、1964年の土木史委員会の設立とともに始まった。この活動の主な目的は、土木技術者に土木史と土木遺産に関する知識を広め、さらに一般の人々に、土木技術および、土木技術者が生活の質の向上に果たしてきた役割への理解を求めることにある。

この活動の中で最も目立つものとして、歴史的土木遺産ランドマークの顕彰プログラムがある。このプログラムで最初に認定を受けたのは、1966年のメリーランド州のボールマン型トラス橋（1869年完成、スパン80ft、Wendell Bollman 設計）であった。その後、このプログラムは順調に進み、認定基準は非常に厳しかったにもかかわらず、現在ランドマークの認定を受けたものは160件に上っている。なお、この認定対象となるには、建設後50年以上経過したものとされている。

一方、世界歴史的土木遺産ランドマークは国内のランドマークより新しいプログラムであるがその選定基準はより厳しく、各分野で世界で最も重要なもの一つでなければならないとされている。これまでにイギリスのアイアンブリッジ、テムズトンネル、エディストーン燈台、フォース鉄道橋、フランスのエッフェル塔、ザンビア、ジンバブエのヴィクトリアフォール橋を含む24件が認定を受けている。世界歴史的土木遺産ランドマークの活動目的の一つには、世界の技術者の交流を

図ることも含まれる。

土木史と土木遺産に関するその他の活動としては、関連出版物、図書目録の発行、受賞等の公表、スライドやビデオによる講習、コンファレンス等での活動やツアーの企画などがある。出版物としては、例えばアメリカ歴史的土木技術者名鑑および、現在準備中の世界歴史的土木技術者名鑑などがある。また、これらと同様に土木史委員会の重要な活動としては、アメリカ土木学会の地方支部における地域の草根活動の活発化を支援することがある。

土木史委員会は貴重で意味があると認められる土木遺産の保存の支援と奨励も行っている。この活動には、歴史的建造物の保存に関するコンファレンスの後援から、取り壊しや建替えが予定されている構造物の歴史的評価までが含まれる。過去30年間のこれらの活動の成功を明らかに示すものとして、他のアメリカの技術関係の協会も、事実上土木史委員会の活動内容を踏襲していることや、カナダやオーストラリアなどの諸国では、アメリカ土木史委員会のプログラムをガイドとして活動を成功裏に展開していることを挙げることができる。

（注：この原稿は歴史的土木遺産ランドマークに関する、当土木史フォーラム小委員会からの取材問い合わせに対する回答として、アメリカ土木学会土木史委員会より寄稿頂いたものです。（1996.5.1受付）

関 連 学 会 ニ ュ ー ス

日本建築学会における建築史分野の活動と課題について

日本建築学会における建築史分野の最近の重要な動きとして、二つの動きを上げることが出来る。その一つは、本年6月に成立した「文化財保護法の一部を改正する法律」、いわゆる「登録文化財制度」の導入である。もう一つは、兵庫県南部地震を契機に見直され始めた、「歴史的建造物の耐震性」を今後如何に確立していくかであり、この2点が最近の建築史分野での主要な活動と課題と言うことができよう。

今回は紙面の関係から、「登録文化財」制度に絞ることにする。この制度の導入によって、歴史的な建造物の保存は新しい局面を迎えるに違いない。これまでの厳選された文化財の指定から、今後はより広範囲で大量の歴史的な建造物に

も保護手段が講じられるようになる。一方、歴史的建造物の届け出制度など、いかに登録制度の実施していくかについて、さまざまな課題が残されていることも事実である。日本建築学会の歴史意匠部門の果たす役割も大きい。また、これまで以上に文化財保護が具体的な設計や街造りと結び付くに違いないのである。

このような状況を受け、現在、日本建築学会関東支部歴史意匠部会をはじめとして、登録文化財制度に関する勉強会が開かれている。また、本年度は歴史意匠部会の中に「歴史的建造物保存WG」が設置され、登録文化財制度についてのより詳細な調査と検討などが行われる予定である。

（国立科学博物館 清水 慶一）

江戸城外堀遺跡・姿現わす

- 地下鉄市ヶ谷駅「江戸歴史散歩コーナー」に今蘇る -

東京の地下鉄新線の工事にともなって、江戸城外堀跡をはじめとする遺跡が発掘調査された。このことに端を発して、その発掘調査の成果と関連した資料等が、営団地下鉄南北線市ヶ谷駅に展示されている。

土木施設の工事中に埋蔵文化財が出土することは良く聞くことである。しかし、それを施設の目玉にしようとする試みは珍しい。東京の地下鉄7号線（南北線）市ヶ谷駅にお目見えした「江戸歴史散歩コーナー」は、埋蔵文化財の活用方策として、さらに江戸のロマンを感じさせる場として内外からの注目を集めている。

帝都高速度交通営団は、この新しい試みを実現すべく英断し、その設計業務を土木学会に委託した。土木学会では、土木史研究委員会が窓口となり、新谷洋二顧問（日本大学教授）を委員長とした、市ヶ谷駅遺跡展示コーナー設計特別委員会を設置してこの設計業務に携わった。委員会には、南北線溜池・駒込間遺跡調査会から考古学・歴史学の学識経験者にも参加していただき、地下駅の制約条件を踏まえて、いかにして発掘された学問成果を設計に生かしていくか、またいかにして市民の共感を得られる設計とするか等、活発な議論がなされた。その成果として平成8年3月、南北線開業と同時に誕生したのが「江戸歴史散歩コーナー」である。展示コーナーには、千葉県三郷に貯蔵されていた江戸城雉子橋門付近の外堀石垣の石を使って、石垣の再現がなされているほか、それに関連する石の切り出し、運搬方法等に関する資料、玉川上水ほか堀とつながりのある遺構についての資料の展示が併せて行われている。

展示コーナーの目玉は、何とんでも、出土した江戸城の石を使って再現した石垣である。

城廓の研究にも造詣の深い新谷委員長が、工事中に何度も足を運び、現場で石工職人を指導して昔の積み方を再現したもので、本物の石を活用したと展示空間を一杯に使った迫力は、それだけで圧倒されるとともに、土木史研究に新しい知見と視点を与えるものと絶賛されている。

しかし、石垣の再現には大きな工夫が懲らされている。地下鉄の構造物にかかる荷重を許容範囲にとどめるため、本物の石を表面より2.5cmの厚さでカットし、鉄板フレームにとりつけて積み上げてある。このような仕組みを感じさせないところに大きな苦心があった。

この石垣を中心に、石材の切り出し・運搬方法を描いた「石曳図」や城郭の普請の様子を示す図、さらには「玉川上水」等の当時の都市施設の絵図がふんだんに展示されている。

また、床には陶板ブロックで江戸の絵図を画きだし、その上に市ヶ谷駅付近の現状模型を置いて、新旧の姿を想像できるように工夫している。

設計にあたっては、「駅舎全体の新しい顔づくり」、「市ヶ谷の歴史性の表現」、「社会教育施設としての役割を持たせる」などの基本的な考え方にに基づき、単に資料の展示にとどまらない、新しいスペースとしての方向性が検討され、2スパンの空間が前述のような形で飾られた。

開業後、足を止める人、じっくり散策される人等、ひとときの江戸の空間にひたり、江戸の風情を感じている姿をよく見かける。土木学会の学術研究成果がこのような形で自然と人々に溶け込む様子は、設計に携われた方々の冥利につきることであろう。

是非お立ち寄りいただいて、江戸を体験されてはいかがでしょうか。



江戸歴史散歩コーナー（全景）



江戸歴史散歩コーナー（江戸城石垣復元）

委員会だより（土木史研究委員会）

（平成 8 年 6 月 6 日開催：於、秋田大学）

平成 7 年度第 2 回委員会が、第 16 回研究発表会の初日、会場である秋田大学にて開催された。以下、当日の議事の中から主なものについて紹介する。

1) 第 17 回研究発表会開催地について

平成 9 年度の開催地は、日本大学工学部（福島県・郡山）にほぼ決定した。最終決定は、8 月開催予定の委員会にて行われる予定。

2) 次期委員会三役の決定について

平成 8 ～ 9 年度の新体制について承認が行われた。新三役は、委員長に榛澤芳雄日本大学教授、副委員長に中村良夫東京工業大学教授、幹事長には佐藤馨一北海道大学教授がそれぞれ就任することとなった。

3) 論文投稿のスケジュールについて

論文募集の段階から発表会までの全体のスケジュールの見直しを行う必要性について討議がなされた。

（平成 8 年 8 月 6 日開催：於、土木学会）

平成 8 年 8 月 6 日、平成 8 年度第 1 回研究委員会が開催され、平成 8 年度新委員会が発足した。当日の議題としては、昨年度委員会からの引継事項ならびに、各小委員会から活動報告がなされた。以下、当日の議事より主なものを紹介する。

1) 第 17 回土木史研究発表会開催地決定

第 17 回土木史研究発表会（平成 9 年 6 月開催予定）の開催地は、日本大学工学部（福島県郡山市）に決定。日程等詳細は今後調整の上決定。

2) 論文投稿スケジュールの見直しについて

平成 7 年度委員会からの引継事項の一つとして、発表会までの論文投稿スケジュールの見直しを、平成 10 年度実施をめざして土木史研究編集小委員会にて今後検討を行うこととなった。

3) 土木史シンポジウム・本年 12 月開催予定

土木史シンポジウム「文化財の登録制度と近代土木遺産の保存・活用（仮称）」の企画書が提出され、本年 12 月開催をめざして土木史を考える小委員会にて検討される。

平成 8 年度土木史研究委員会構成

委員長	榛澤 芳雄	委 員	青木 栄一
副委員長	中村 良夫		市川 紀一
委員兼幹事長	佐藤 馨一		今本 博健
			浦 勝
			片寄 紀雄
			合田 良實
			小西 純一
			竹林 征三
			野村 和正
			藤田 龍之
			松村 博

幹 事	青山 隼人		藤井 三樹夫
	五十畑 弘		増淵 徹
	伊東 孝祐		
	小野 芳朗		
	小野田 滋		
	神吉 和夫		
	久保田稔男		
	今 尚之	顧 問	新谷 洋二
	清水 真一		天野 光三
	昌子 住江		五十嵐日出夫
	福島 二郎	事務局	石郷岡 猛

土 木 史 ニ ュ ー ス （ 1 頁よりつづき ）

日本の歴史を塗り替える三内丸山遺跡（築土構木の世界）

住居や道路、湊、水道などの施設については今一つわからないが、20mを超える 6 本の栗の巨木を内傾斜付きで正確に立て込まれている柱跡からは高い工学的技術が認められる。埋込部は周面を焼いた後に陶土らしきもので根固めされており、それで数千年の風化に耐えたものと考えられる。雪深い長い冬季を過ごした住居の様式は不明であるが、衣類は土偶などからみても貫頭衣などではなく、ズボンや袖付きの重ね着もあったと推定される。

文化的なものとしては笛に使われたとみられる精巧な翡翠の珠、漆加工の網罟、皿、鉢、櫛、琥

珀の原石、板状土偶などがあり、黒曜石の鏃、包丁、多種多様の膨大な量の土器などの実用品も多く出土している。このほか、天然アスファルト、瓢箪の種、マグロの骨など、相当に広い交易があったことが立証されている。このような広い交易を支えたのは対馬海流と考えられるが、この点については今後の検討課題であろう。

三内丸山にこのような高い文化が集まり、1,500 年間も継続した後になくなっていった理由を明らかにすることは日本の歴史を大きく塗り替えられることになると考えられるが、如何なものだろうか？（八戸工業大学構造工学研究所 塩井 幸武）

第 16 回 土 木 史 研 究 発 表 会 報 告

第16回土木史研究発表会が、平成8年6月6日（木）、7日（金）の両日にわたって、秋田大学を会場に開催されました。今回の研究発表会は、発表論文が69編（審査付部門13編、自由投稿部門56編）、参加者も200名を超え、昨年の長崎大会同様、過去最大の開催規模になりました。このように土木史研究が、内容、広がりともに、年々、充実されておりますこと、大変喜ばしいことと存じます。

研究発表は、橋梁、鉄道、河川、ダム、近代化遺産など多岐にわたりますが、今大会の特徴としては、甲突川や、石橋に関するセッションが設けられたこと、また地元セッションとして秋田セッションが設けられたことがあげられます。また、画像データやインターネットを用いた情報公開など、電子メディアの活用に関する研究も急速に進展した感があるのも、今大会の特徴です。

その他今大会では、特別講演、写真展、見学会など多彩な企画が実施されました。研究発表会1日目の午後には、「Conservation of the 1811 Railway Viaduct at Lough Milton, Scotland」と題して、英国土木史委員長のパクストン教授による特別講演がありました。

また、大会期間中、先に東京駅で開催され、好評を博した写真展「近代土木遺産を訪ねて - 技術造形家の仕事 - 」が行われました。この写真展は、『建設業界』（社団法人 日本土木工業協会の機関誌）の表紙に使用された近代土木遺産（監修 東京大学篠原修教授）を、同協会のご好意により展示したもので、大会参加者のみならず、本学学生や学内関係者など多数の入場がありました。

1日目の研究発表終了後、懇親会が行われましたが、予想をはるかに上回る約100名の参加があり、乾杯のグラスが不足するというハプニングのおまけつきの盛況ぶりでした。懇親会ではパクストン先生からスピーチを頂戴するとともに、来賓でみえられた秋田大学長、秋田市長、そして五十

嵐委員長に、フォース橋の記念のおみやげが贈呈され、和気あいあいとした雰囲気、あっという間に予定の時間を過ごした楽しい懇親会でした。

研究発表会の翌8日（土）には、秋田市周辺の歴史的施設の見学会が行われ、24名が参加しました。見学先はいずれも歴史的遺産として、保存・利活用されている施設で、旧国立農業倉庫や、前日の研究発表会で紹介された古代秋田城、藤倉ダムなどです。旧国立農業倉庫は、1934（昭和9）年に米の需給調節を目的としてつくられた倉庫で、用途廃止により、その保存・利活用が検討されていましたが、平成7年に開学した秋田公立美術工芸短大のアトリエとして、また工芸体験棟、地元との交流センターとして活用されています。

また、秋田市高清水丘陵にある古代秋田城は、760年頃、北方対応と、大陸の渤海国や北海道との交流拠点とみられる施設で、現在東門と築地堀の復元が行われており、完成後は、小学校の通学路としても利用される予定とのことです。

昼食をとった湊御蔵は、江戸時代から明治までの保管庫で、取り壊しが予定されていましたが、陳情や意見書等により、現在は一部をレストランとして利用しながら保存されています。

藤倉ダムは、平成5年に国の建造物の重要文化財に指定されました。「近代化遺産」としては、碓氷峠鉄道施設とともに、わが国初の指定となった施設で、現存する最古の上水道専用ダムです。

いずれの見学先も週末の土曜日にもかかわらず、関係機関の方のご説明を頂いたことで、参加者の理解も深まったことと思います。

このように研究発表会の実施にあたりましては、（社）日本土木工業協会はじめ、地元秋田市、秋田県、建設省、運輸省、日本道路公団の各事務所、コンベンションビューロー秋田など、多くの皆様から、多大なるご支援を賜りました。開催校としてこの場をかりてお礼申し上げます。

（秋田大学 清水 浩志郎・木村 一裕）



特別講演者のパクストン教授



見学会で視察した藤倉ダム

土木史関係図書（定期刊行物，雑誌 - 土木一般 - その2）

雑誌名	発行	期間（～から～まで刊行）	備考
土木技術	土木技術社	昭和21年6月（1巻1号）から現在	「土木科学」より改題
土木建築工学	工学社	昭和22年10月（1号）から昭和23年7月（5号）まで	
土木工学	土木雑誌社	昭和27年9月（1巻1号）から昭和31年8月（5巻8号）まで	以後廃刊
季刊建設	全日本建設技術協会	昭和22年9月（1号）から昭和32年3月（12号）まで	以後「月刊建設」と改題
工学研究	工学出版社	昭和31年4月（5巻1号）から昭和43年5月（17巻5号）まで	以後廃刊
月刊建設	全日本建設技術協会	昭和32年7月（1巻1号）から現在	「季刊建設」より改題
土木技術資料	土木研究センター	昭和34年1月（1巻1号）から現在	
土木施工	山海堂	昭和35年12月（1巻1号）から現在	

行事案内

First International & Eighth Australian Engineering Heritage Conference

日時：1996年9月29日～10月2日

会場：Newcastle NSW Australia

（発表論文の締切は終わっております。）

日本からも発表の予定です。

オーストラリアの10月は春です。気温15°

Pre Conference Tours を含め種々のツアーも予定されています。その中には鉱山と蒸気機関車のあるColliery Historic Park の見学なども含まれています。ぜひ多くの御出席を！

詳細は当フォーラム事務局にお問い合わせください。

International Planning History Conference

THE PLANNING OF CAPITAL CITIES

日時：1996年10月17日～10月20日

会場：University of Thessaloniki Greece

（発表論文の締切は終わっております。）

日本からも発表の予定です。

テッサロニーキ市はギリシアの丁度中央で、半島の先端に位置するアテネとブルガリアのソフィアの丁度中間に位置します。Tour of Thessalonikiも予定されております。ぜひ多くの御出席を！

詳細は当フォーラム事務局にお問い合わせください。

編集後記：

これまでに1年分（3回）の土木史フォーラムを発行してきましたが、皆様のお役に立っているでしょうか。事務局までご意見ご感想をお寄せください。

また、皆様の土木史研究に対するお考え、体験談などをお待ちいたしております。

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No. 3
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 武部 健一
事務局 日本大学理工学部 小山 茂
〒274 船橋市習志野台7-24-1
TEL 0474 - 69 - 5219 / FAX 0474-69-2581
E-mail : koyama@trpt.cst.nihon-u.ac.jp

CONTENTS

- NEWS

Discovery of the biggest ancient community "Sannai Maruyama Ruins" (BC3500). (SHIOI Yukitake)

- FORUM

Civil Engineering History, (SHINOHARA Osamu)
from an amateur's cultural subject to a specialized independent subject.

- LOCAL NEWS

Registration on the List of "National Historical Trunk Road" in Hiroshima Area. (MONDEN Hirokazu)
Conservation of the Concrete Railway Arch Bridge in Hokkaido. (KON Naoyuki)

- OVERSEAS NEWS

History and Heritage program of the American Society of Civil Engineers. (PRASUHN Alan)

- OTHER INSTITUTIONS

Trend of Historical study and themes in Architectural Institute of Japan. (SHIMIZU Keiichi)

- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering).

Conservation Project of Ruins of Masonry Wall of the Outer Moat of Edo Castle.
Meeting report.

The 16th Conference of CHSCE at Akita.

- BOOK GUIDE (Journals; series #2)

- WHAT'S ON

1st International and 8th Australian Engineering Heritage Conference. (29 Sept. - 2 Oct. 1996)

International Planning History Conference. (17 Oct. - 20 Oct. 1996)